

阿波國 すきま 漫遊記

— 関東からの転入者による徳島再発見 —

VOL.7 徳島市八多町の水車小屋群



■宝丈の水車小屋

八多川に残る水車小屋で最も上流にある。水輪(みずわ)は鉄製で、水の掛け方は水輪の中央の高さから掛ける「胸掛け」である。内部には1斗1升、1斗3升の搗き臼があり、9軒の家が共有していたという。9日間は各家が順番に使用し、10日目はどの家が「踏んでもよい」ルールだったという。「踏む」というのは、水車で精米等をする事。

■再建された水車小屋

先月号でまったく観光化されていない水車小屋を紹介したが、実際にそうした水車小屋を見つけたのは容易ではない。そこで今回は、もともと水車小屋があった場所に、町おこし等の理由で再建された水車小屋を紹介しようと思う。そしてこうした生い立ちの水車小屋の観賞ポイントについても詳細に見てゆきたい。

徳島市の八多町には、現在3棟の水車小屋がある。これらの水車小屋はいずれも新しい建築なので、ぱっと見には和風レストランや公園などにあるイミテーションの水車のように見える。



■庄田の水車小屋

庄田公園の中にある。3水車のうち、唯一内部が一般公開されている。搗き臼×2。



■神子上の水車小屋

「みこがみの白場」と呼ばれていたという。7軒の家が共有していた。1斗5升の搗き臼1つ。

宝丈の水車小屋の写真をみると、水輪みずわが鉄製なのがわかる。これをニセモノっぽいと見てはいけない。

■鉄製の水輪は本気の証し

だがこれらの水車小屋はもともとこの場所にあったのを再建した物件なのだ。実際、内部の石臼は旧来のものがそのまま使われている。しがたって、建物の新しさや、故意に民芸風にしつらえたエクステリアに惑わされず、水車小屋の本質的な要素に着目するならば、十分に実用水車としての評価・観賞が可能な物件なのである。

木造の水輪は腐りやすく定期的に作り替えないと壊れる。軸も木であれば軸受けの摩擦も大きく効率が悪い。まったく観光を意識していない水車小屋は、実は鉄製の水輪である場合が多いのだ。

■導水路をチエック

八多川のような大きな川に水車小屋を作る場合、本流に水輪を掛けることはしない。落差が少なくエネルギーが効率的に利用できないし、夕立や台風などで増水したときに壊れてしまうからだ。水輪に掛ける水量は一定しているのが理想だから、水車は平坦地では用水路に掛けるし、傾斜地では沢から樋で水を引いて掛けることが多い。

水車小屋の建物が新しくなっているも導水路は本来の構造のまま残っていることが多いので、導水路の自然さは実用水車を見極めるときの重要なチエックポイントだと言えらるだろう。



■取水部

宝丈の水車の取水部。開閉が可能になっている。水車小屋への水路として極めて自然な形態。



■堰(せき)

神子上の水車の上流にある堰。ここから用水に分水して、落差をかせいでゆく。

■痕跡を見逃すな

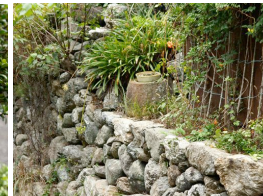
先月号では水輪が失われた水車小屋を紹介したが、水輪だけでなく小屋もとも消滅していることもあるだろう。そういう場合でも、地元古老の話や痕跡からかつての姿を想像することができる。次の写真は宝丈の水車の下



宝丈水車の内部を見せてもらった。搗き臼と先輪の様子がよくわかる。石製の先輪は八多の水車の特徴だろうか。精巧な細工だ。



石舟橋の近くの民家では、庭木の整枝のおもりとして、杵の先端につける「先輪」という部品が使われていた。



宝丈の水車の上流には「コナヤ(粉屋)」という家があって、水車で製粉業をしていたという。いまその場所には搗き臼が転がっている。

かつて八多川には、現存する3棟以外にも多くの水車小屋があった。市内からサイクリングをかねて、水車小屋探索に行くのも面白いかも知れない。



流にある堰の様子だ。白線の部分に水車小屋の基礎の石垣が残っている。